

特集にあたって (特集 ターリバーン敗走から6年目のアフガニスタン)

著者	鈴木 均
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	139
ページ	2-3
発行年	2007-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005257

特集／ターリバーン敗走から6年目のアフガニスタン

特集にあたって

鈴木均

アフガニスタンは実に魅力のある国である。二〇〇三年の秋にアフガニスタンを短期間訪れたとき、筆者は首都のカーブルだけでなく、できれば地方の都市や農村の様子も垣間見たいとの思いから、バミーヤン周辺への小旅行やヘラート近郊農村の訪問を試みた。よく言われるアフガニスタンの「純朴な」人々、この国の「山がちな」大地がどのようなものであるかをこの時初めて知った。

特にバミーヤンへの車での旅行については、帰国後にアフガニスタンの事情をよく知る友人から「なんと無謀なことを」とたしなめられたが、これはいまでも敢行して良かったと信じている。その後は現在までアフガニスタンを訪れるチャンスがないがこの年から始まったアフガニスタンの研究プロジェクトのなかで、筆者はこの時のアフガニスタンを折に触れて思い出した。ささやかとはいえこの時の経験がなければ、四年間プロジェクトを続けることは到底できなかつたと思われるからである。

四年間のプロジェクトの最初の企画案に、筆者は「アフガニスタンを対象とした地域

研究を日本において本格的にスタートさせる」と書いた。今思えば随分と大上段に振りがぶつた言い方で恥かしい限りなのだが、その後の活動の過程で、とくに日本の若い人々の中からアフガニスタンに本格的に取り組んでいこうとする優秀な人材が何人も出てきていることを知った。これはアフガニスタンにとっても日本にとっても大いなる朗報であると同時に、こうした意欲が今後ともそがれることなくアフガニスタンの着実な発展に繋がっていくことを願うのみである。

この四年間にあったもうひとつの出会い、尾崎三雄さんというアフガニスタン研究のバイオニアである。尾崎さんご自身は既に一九八五年に亡くなっているが、その後ご遺族の方々が大切に保存していた七〇年も以前のアフガニスタン資料を目の当たりにして、日本とアフガニスタンの関係の歴史の深さを思い知らされた。これらの貴重な資料の多くが若干の経緯を経て、現在ではアジ研図書館に所蔵されるに至ったことも、このプロジェクトのもたらした不思議な機縁と考える他はない。

尾崎さんは農商務省に勤務する農業技師であったが、一九三五年の七月に上司から「アフガニスタン行」の話があり、その年の九月から奥さんの鈴子さんを伴ってアフガニスタンに赴任した。アフガニスタンに長期滞在した最初の日本人の一人である。帰国後は各方面の注目を集め多数の論稿も執筆したが、やがて日本は太平洋戦争に突入、尾崎さんは戦後はアフガニスタンに関して全く口を閉ざしてしまふ。

だが尾崎さんが恐らくは山口のご実家での教育と薫陶の結果として、並外れた几帳面さをもってこの三年間の経験を克明な記録に残されたことは、後進の我々にとってどれだけ貴重なことであるか計り知れない。尾崎さんご夫婦のアフガニスタンでの活動は詳細な日記と記録ノート、数百枚の写真のかたちで山口市のご実家の蔵の奥深く保存され、九・一一同時多発テロをきっかけに再発見・再評価されることとなったわけである。このような偶然の連鎖によって、我々のアフガニスタン・プロジェクトは必然的に日本とアフガニスタンの関係史の探求というテーマをも内包することになった。

一九三〇年代半ばという国際的にも極めて重要な時期に、日本が戦略的な発想からアフガニスタンとほんの短期間とはいえず友好関係を取り結ぼうとしていたことは、現在の両国関係を考える際にも教えられる点が少ない。当時のアフガニスタンを取り巻く国際関係の苛烈さは今と同じく通常の想像を超えるものがあり、それゆえ一九三〇年代当時の日本のアフガニスタンに対する外交的な関心も決して長続きすることはなかったのである。

だがむしろそのような歴史ゆえに、現在のアフガニスタンの日本に対する期待は、近隣諸国や他の欧米諸国に対するそれと大きく異なる側面があるだろう。それは同じアジアの国としての対等な関係の構築であり、いわばアフガニスタンとの関係において相手の立場を尊重し自国の利害のみを求めないという当然のことなのだが、実際にアフガニスタンの土地においてこの原則が踏みにじられ続けてきたことは、この国の歴史を少し紐解けば明らかなことである。

昨年刊行された『日本・アフガニスタン関係全史』（明石書店）も、こうした両国の数奇ともいえる関係を極めて詳細かつ丹念に辿った労作であり「怪著」であるが、著者の関根正男さんは、またいたって控えめな好人物である。アフガニスタンを取り巻くこうした人々との出会いが面白くまた刺激的で、四年間のプロジェクトは振り返ればあっという間に終わったというのが率

直な感想である。

最近この五年間を振り返るという意味で、NHKのBSチャンネルで「アフガン空爆から五年」と題するドキュメンタリー番組の特集が組まれた。一週間のあいだに放送された五本のドキュメンタリー作品はすべて海外（米・仏・デンマーク・ノルウェー）の制作だが、「よみがえるターリバン」、「女性代議士の闘い」、「追跡ヘロイン・コネクション」、「ザルタレ村女性たちの希望」、「歴史が盗まれる」と題された各回は、アフガニスタンを巡る諸問題をそれぞれの視点から捉え、それなりに見応えのあるものだった。

だが同時に、これらのドキュメンタリー作品に一樣に欠けている視点というものがあるとするれば、それはアフガニスタン国家の混迷した現実のなかで、国家建設の主役としての「アフガニスタン人」がどのように立ち現れて来るかというプロセスそれ自体への謙虚な関心ではないだろうか。

二〇〇一年九月一日の米国同時多発テロに端を発した、アフガニスタンでの米英軍主導によるアルカイダ掃討の空爆作戦から五年を経て、アフガニスタンは現在大きな岐路に立たされている。二〇〇三年以降米軍がイラクにおいて作戦を展開し、国際的な関心もイラクに向けられたなかで、アフガニスタン南部のパキスタン国境地帯において、「ターリバーンの復活」現象が顕著になってきているからである。

アフガニスタンのこうした現状に対する危機感は、何よりも現在軍事的に関与している米国およびNATO軍によって共有されているものと思われるが、この国とそれを取り巻く地域の将来にわたる安全保障システムをどう構築していくのかについての展望は、現在のところ全く不透明である。だが同時に忘れてはならないことは、アフガニスタン国家の将来像は誰よりもアフガニスタン人自身が決めるといふ単純な原則である。

それでは主人公となるべきアフガニスタン人はどこにいるのか。それこそは我々のプロジェクトが四年間考え続けてきたことであり、そのつたない成果の一端をこの特集の各論稿の中から読み取っていただけるとしたら幸いである。

本特集は二〇〇三年度から四年間、アジア研において実施してきたアフガニスタンに関する研究会の最終報告の提出に際して、その成果を要約していち早く伝えるとともに、アフガニスタンの現状についての最新情報を盛り込むことよって、今アフガニスタンに再び目を向けることの必要性を訴えようとするものである。

（すずき ひとし／アジア経済研究所新領域研究センター）